

青の芽吹くころは  
笹山久三

# 四万十川



第3部

# 四万十川

第3部



河出書房新社

## 四万十川・第3部

——青の芽ぶくころは

一九九一年一月十四日 初版発行  
一九九一年五月十五日 三版発行

著 者 笹山久三

装 幀 菊地信義

装 画 後藤えみ子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二・三二二

電話 三四〇四一二〇一（営業）  
三四〇四一八六一（編集）

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1991 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります  
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-309-00650-7

笹山久三（ささやまきゆうぞう）  
昭和二十五年、高知県生まれ。高  
知県立中村高校西土佐分校卒。  
『四万十川―あつよしの夏』で昭  
和六十二年度文藝賞を受賞する。  
現在、郵便局勤務。他の著書に『四  
万十川・第2部―おいわかれの  
日々』『飢餓船』がある。

# 四万十川

## ・ 第3部

――青の芽ぶくころは



春一番が吹いてから、しばらく暖かい日が続いた。膚にさわっていく風のせいか、冬枯れの山肌にも春の訪れを思う。北風があつめてくれた木の葉の絨毯は、南の風が吹き散らしてしまった。それでも、鬱蒼と生い茂った茅を敷きつぶせばそれなりのねぐらができた。突然訪れてしまった春の中に届いてくる鳥の音は、まだ冬のものだ。さつきまで続いていた幾百かの小鳥の行進も、梢を渡る風のいたずらのように、通り過ぎるままに消えた。

この山を越えてきたのだろうか。少年院を逃げ出して、集落の消防団に取り押さえられた少年のことが頭に浮かんで、とりとめもなく漂っていた。

「たたかんでもええがに。なんちゃせざったがに……」

酔っ払いの喧嘩よりほかに事件らしい事件のない集落を緊張させ、その分だけ騒がせた事件の中で、テッチちゃんの吐き出した言葉だけが鮮明に残っていた。消防団と一緒に行動していて、少年のつかまる現場に立ち会っていたテッチちゃんは、そればかり言って悔しがった。つかまってい無抵抗になった少年を、団員の一人が英雄気取りで殴りつけたというのだ。連行されていく少年の目は、すべての希望を奪い去られた者のように暗かった。

「鬼でもあんな顔はせん……」

そう言つて、殴りつけた男を批判したときのテッチちゃんの顔は、はつきりと虚空の一点をにらんでいた。本当に怒っていたのだ。集落の女たちは、仕事らしい仕事がなく川漁ばかりやっている駐在さんだけだったらどうなっていたのかと、その事件のことを語り合い、ある女は男たちがいる時期の事件で幸いだったと言った。篤義は、あの事件を振り返るとき、女たちと同じこと以上には何も思わなかった自分を見つけた。それが、決して自分への責めにつながることはなかったが、テッチちゃんの気持ちを共有できないでいることに、何とはなしにわだかまっていた。

右の視界の隅っこで何かが動いた。その方に目をやれば、黒い雄猫が地面にへばりついて身を隠しながら、何かを狙っていた。猫の定めた焦点の方を見れば、いつ現れたのか、メジロが一羽せわしげに遊んでいる。地表近くまで垂れた櫓の枝先が、小鳥の遊ぶままに、小さく揺れ

ている。黒猫は、更に獲物に接近し、短いしっぽを小さく振ってタイミングをはかった。メジロが飛び立つ瞬間を狙ったのか、それとも自分の行いを氣どられて焦ったのか、猫の襲撃が空を切った。メジロは、思わぬ襲撃に慌てるままに乱れ飛んでどこかへ行ってしまった。狩猟に失敗した黒猫は、何事もなかったかのようにゆつくりと歩き出した。

「へたくそ」

篤義は、立ち去ろうとする黒猫に声をかけた。飼主にかわいがられていたのだろう、猫は、人間のいることに驚きもせず、立ち止まった。食えることさえ忘れる恋の季節を里で過ごしていたせい、毛並みに艶がなく、痩せている。餌の豊かな山の中が過ごしやすいの、子育てに縁のない雄猫は、何度かの恋ぐりの果てに家出をする。自ら選んで野良猫になってしまうのだ。どうやら、人間の姿に餌を想像したようだ。立ち止まったまま座り込んでしまった猫に話しかけようと、篤義は起き上がって座り直した。猫は、わずかに逃げ腰になりかかったが、よほど空腹らしく、思い直すままに腰を下ろした。

「なんにも持つちよらんがよ」

篤義が両手を広げて見せても、猫には通じない。そのとき、猫の耳が下の道の方角に反応した。警戒心が体のあちこちに現れるままに動き出して、茅の原に消えていった。どうせ猟師の連れた犬の気配でも感じたのだろう。

猫がいなくなつてしばらくたってから、人の近寄る気配があつた。鼻歌は女の声だ。篤義は、

三十メートルばかり下の山道に目をやった。脚にぴったりと張り付いているスラックスで誰だかすぐに分かった。

「女が一人で山にきたらいけん」

篤義は、山道に向かって声をかけた。

「あら……。何しよるがね、そんなとこで」

吉岡さんは、突然の声に一瞬ピクツと反応したが、まぶしげに篤義を見上げた。

「狼が出るぞ、山の中は」

「出たのは狼少年じゃ」

「ばかぬかせ。おらは嘘つきじゃないぞ、ちびつとしかねや」

「そうか、これは言葉を間違えた。狼が出たらこれで一撃よね。私は剣道二段じゃもん」

吉岡さんは、そう言いながら身軽に山肌を登ってきた。右手に持っている杖は、たしかにそのまま武器にもなりそうだ。吉岡さんは、代用教員で、小学校にきている。中学校も同じ校舎にあるせいでしょっちゅう顔を合わせているが、小学校の教員と触れ合う機会はめったにない。名前も知らない教員もいる。その中でも吉岡さんは、存在感があつた。若いけれど美人というわけではない。目立つのはスラックスだ。吉岡さんと出会うと、どうしても脚の付け根にある扇状地のようなわずかな膨らみに視線が流れ寄ってしまう。自分の同級生の女の子たちは、その線をあらわにする服装は絶対にしなかったし、体育の時間も、黒くてぶかぶかのズロースを

はいたダルマさんになるだけだった。

「何しよるがね、こんなとこで」

吉岡さんは、篤義が答えなかった質問を繰り返した。

「昼寝じゃ」

篤義は、さっきから視線が流れ寄ってはうつろに漂っていた扇状地から逃れて、吉岡さんの顔を見た。自分の目の動きを観察して楽しんでいたとも受け取れる笑顔があった。少し気圧された感じがした。

「吉岡さんは、何しよるが」

「先生って言わんが……？ 代用でも教員ぞね」

「小学校のじゃろ。おらは中学じゃもん。おらを教えることは、もうないに。じゃろ？」

「カーツ、なつまいきいー。レディーには席をゆずるもんよ、ホレ」

吉岡さんは、前に立つと杖で篤義の股をつついた。視線が思わず扇状地の膨らみに流れたが、そのまま流して気持ちの動きを隠した。促されるままに席を立て、すぐ脇の茅株を尻で敷きつぶした。枯草の匂いが鼻に満ちて、自分のなにもかもが山肌の日差しに溶け込んでいくような感じがした。

「気持ちがあええねえー、山は。なんもかんも忘れるみたいな。窮屈そうじゃね。あつ、そうか。誰かに見られたら怪しまれる思てるがじゃろ……」

「だが」

「そんなはずないか。子供じゃもんね、山本くんは……」

「しよっちゅうくるが……？ 山へは」

篤義は、子供扱いされて、ムツとしかかった気持ちを抑えて問いかけた。

「しよっちゅうじゃないけど、たまにね。考えたいことがあつたりすると……」

「なんかあつたが……？ いやなこと」

「ううん、ずっと昔のことよ。子供には分かんこと」

「なら、オラは考えごとのじゃまじゃろ」

二度も子供扱いされたことに小さな腹立ちをおぼえた。篤義は、自分の中で窮屈なほど大きな位置を占めてしまった吉岡さんから逃れる口実を、その腹立ちに見つけて立ち上がった。そして、そのまま歩き出した。

「おつてよ、ここに。考えごとはおしまい。山を歩いてると忘れるがよ、なにもかも。考えんでもええことばっかりなが、本当は」

「もう昼じゃけん。飯を食わにゃ」

「帰るが……？」

「ううん、奥へ入る。テツちゃんの仕事場へ戻るがよ」

「テツちゃんて？」

「山で仕事をしよる人。今日はとぎで来たがじゃ」

「とぎって……？」

「お供じゃ。一人じゃさびしからうけん。犬はおるけんどね」

「なんだ。思春期やりよったがじゃないのか」

「なに？ それ」

「物思いにふける時期のこと。自分の内側ばかり見詰めて悩む時期のこと。一人で来たがかった。私もいつしよに行つてええかな、ご飯はいらんから」

「ええよ、ご飯も食べたらええ」

吉岡さんは、返事を聞きながら立ち上がった。片膝を立てて立ち上がったとき、股の付け根の扇状地が、いつもと違う形に見えた。喉が勝手に萎縮して息苦しい感じがした。少しのあいだ耳の中に心音が満ちた。吉岡さんと、これ以上二人つきりでいることそのものが息苦しかった。テツちゃんが混ざれば、山にいるゆつたりとした気分で話ができるかもしれないと思つた。

山には、誰がいつつけたとも知れない小道が幾筋もある。谷が枝別れするごとに現れる山道は、そのどれもが、沢の水源に近づくにつれ、つづら折れの道筋を尾根に向かつて延ばし始める。梨の木峠に向かう本道は、遠い昔には街道のような位置を受け持っていたらしく、峠を越

えればよその集落に連なっている。旅の安全を祈願して作られたのだと言う人もいるし、山仕事  
の安全を祈願して祀られたとも聞いたが、今では始まりを推しはかりようもないほど古びて  
壊れかけた地藏さんが、この道筋を守っていた。

「二人つきりが、よつぼどいやながじゃね」

「なんで……？」

「足が速い。逃げるみたいに速い」

吉岡さんは、篤義が足を止めて振り向くと、上気した顔に笑みを浮かべて近づいてきた。

「もうすぐじゃ。煙が見えるろ、ほら」

篤義は、杉林の山肌をゆったりと這いのぼっている青い煙を示した。吉岡さんは篤義の示した煙をやっと探し当てると、「ああ……」と小さくうなずいて見せた。その顔が、いつもよりきれいに見えた。本当は、この先の男坂に入って近道をしようと思っていたが、言われてみれば、山の中での二人つきりが醸し出した空気から逃げていたような気もする。息苦しさを自分だけが感じて、吉岡さんは何も感じていなかったとすれば、こっけいな話だ。篤義は、そんな思いをめぐらせながら、できるだけゆつくりと歩いた。

「やっぱり思春期なのかな」

背中から、からかっているような笑いを含んだ吉岡さんの声が当たった。篤義は、返事に困っている気持ちを無視の態度に隠して振り向かなかった。歩いているうちに、いつのまにか自分

の耳が、吉岡さんの足音と杖の音を聞いていることに気づいた。やっぱり、なんだか窮屈だった。

「もう、大人になりかかっているのかもしれないね」

「なんで……？」

今度は、振り向かずに応対だけでした。

「そんな感じがする。例えばね、なんかするときに女の子がどう思ってたこと意識しない？」

「なんで……？」

「ほら、先生に良く思われたいときは先生のことを意識して何かをするでしょ。あれとおんなじみたいに、ある女の子を意識するっていうのかな、そんな気持ちの動き」

「しらん」

ないとは言えなかった。少し前に、そんな気持ちの動きが自分をつかまえてしまったとテツちゃんに話したら、動物の雄になりかかったのだと言って笑われた。なぜそんなことを言うのか分からなかったが、テツちゃんは、夢精はないかとカチンポに毛が生えてないかと、からかうばかりで相談したことには答えてくれなかった。本当は、月子のことしか見えず、月子の目ばかり気にするようになっていく自分のことが分からなくなっていた。

「何年生じゃったっけ。山本君は」

「一年。もうじき二年じゃ」

「そうか……それじゃあ大人になりかかっているがかもしれないね」

吉岡さんは、妙にそのことにこだわっている。返事をしないまま歩いていくうちに、出会ったときの自分の目の動きを思い出してしまった。それを観察されていたのかもしれないと思った途端に耳たぶが熱くなった。頬にある照るような温<sup>ぬ</sup>みが表情に表れているのがわかって、たまらなく恥ずかしかった。そんな気分のまま歩を速めて、ひと尾根越えたとき、テツちゃんの小屋が見えた。

「おーい！」

気まずい照れを、叫びと大きな動作で隠しながら小屋に向かって呼びかけたとき、タロがひと吠えして駆け出した。叫び声のこだまの後ろをタロの声が追いかけて遠ざかっていった。テツちゃんは、しばらくして立ち上がったが、目は吉岡さんの方に釘づけになっている。表情が見えなくても、呆然としているかのように表情も動きもない仕草は、日ごろのテツちゃんにはないものだ。『言い訳は許さんぜ……』テツちゃんをからかっている想像の中に、そんな言葉が乗ったとき、鼻から笑いが漏れた。

「ずいぶんええ加減なお供じゃねえ。全然違う場所におった」

吉岡さんの声が、すぐ近くにあった。振り向くと、いつのまにかくつきそうにしている。タロを怖がっているのだと思った。

「大丈夫じゃ。杖貸して」

「どうして」

「知らん人が武器を持つちよつたら警戒する」

そう言つてうちに、タロが勢いよく駆け寄つてきた。吉岡さんは、タロの突進に慌てて杖をよこし、それと同時にジャンパーの袖口につかまつた。篤義は少し背を屈めてタロの突進を待った。タロの挨拶は乱暴だ。前足でドンツとくる。その後は周囲をぐるぐる回りながら、体を撫でることを要求する。何度もの前足を体にあずけてくるのだ。

ひとの洋服を前足でさんざん汚したあと、吉岡さんとの仲をとりもつてやると、タロは、案内人気取りで先を歩きだした。時折、道端の立木の臭いを嗅ぎ回つてシヨンペンをひっかけてはいるが、道草を食う様子もない。

「利口な犬よね」

「うん」

山道から、この二年の間にテツちゃんとタロの歩みがつけた小さな坂道に差しかかったとき、吉岡さんが間が持てなくなつたように話しかけてきた。自分がさつきまで包まれていた気分が吉岡さんに感染したような気配を背中に感じて、表情を覗き見てやろうかという類いのいたずら心が持ち上がりかけたが、それはそのままにして吉岡さんの話しかけを待った。テツちゃんの出現で、さつきまで包まれていた何とも言えない雰囲気は嘘のように消えた。小屋は、灌木

や枯れた茅の向うに隠れて見えない。

「テッちゃんてどんな人？」

案の定だ。

「会や分かる」

そう言ったあと、からかって遊んでいるような気がして、くすぐりたい笑みが浮かんだ。それを噛み殺しながら続きを待った。荒くなった吉岡さんの息遣いがすぐ後ろに聞こえる。

「高井さんという人でしょ」

「何で知っちゃうるが？」

「ちよっとね」

意外ななりゆきに、自分の中でとりとめのない憶測が急ぎ足に巡ったのが分かった。

「ここを探してたがじゃない？ 本当は」

「なんで……？」

「ちよっと思ただけじゃ」

吉岡さんは、返事をしなかった。篤義は、自分の頭の働きの吉岡さんと出会った時と今を行き戻りしながら、吉岡さんの不自然な言動を探し回っているのを感じて、感じるままにやめた。いたずらな笑みが引いたとき僅かに表情が強張ったのが分かった。そのことに思いが集まるうとしたが、自分の中に得度が知れない感情が住み着いたような気がして、目の前に過ぎていく